

2024年10月26日

次世代に向けた『道徳教育』のパースペクティブ  
シンポジウム

## あらためて「道徳教育」を問う — 目的論、方法論、学習論、課程論の観点から —

鹿毛雅治

慶應義塾大学

教職課程センター／大学院社会学研究科

## 本日の話題提供

1. 何のための「道徳教育」か  
— 目的論 —
2. どのように「道徳教育」をするか  
— 方法論 —
3. どのように「道徳」が学ばれるのか  
— 学習論 —
4. 「道徳教育」のカリキュラムをどうするか  
— 課程論 —

## 何のための「道徳教育」か

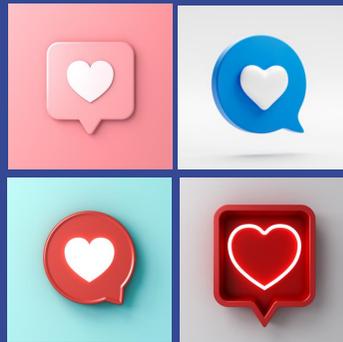
### ●そもそも学校教育が目指すこと

・個性と社会性の統合的発達

← 教科課程と教科外課程

●民主主義

●自主・自律・自由



## 教育学の先達に学ぶ①

●人間らしい生活や行動をするために、性格や習慣や判断や選択の力が協力してはたらく(中略)道徳的ということは、そういういろいろな要素がはたらいて、人間的に価値の高い行動をするところに成立(中略)その中で、中心的になることがらは、人間が自分の責任で、自主的にあるねうちを実現するために選択するということ

●道徳における二つの大切な要素

①あくまで自主的に自己の責任において行動を選択するということ  
②将来の見通しをもって目的を実現する能力(社会についての知識や実現する技術を伴う)

→(善悪の)自主的な判断(内面的必然的欲求に支えられている／知的・論理的能力に基づく統制によって成立する)

勝田守一(1972)道徳と教育 『人間形成と教育(勝田守一著作集4)』国土社

## 教育学の先達に学ぶ②

### ● 道徳教育のための手引書要綱

(総説・小学校編の道徳教育:昭和26年4月25日・文部省)

教育の根本的な目標は、民主的な社会を形成し、その進展に貢献することができる自主的自律的な積極性をもった人間を育てることにあると考えられる

● 道徳をありうるものとしてではなく、あるべきものとして人間にしいようとする立場こそ、まずなによりも道徳に背反するというべきである。

上田薫(1993)道徳教育論(上田薫著作集6) 黎明書房

## どのように「道徳教育」をするか

### ● 徳目主義を超えて

### ● 生活の現実から: 問いの必然性



## 教育学の先達に学ぶ③

### ● 徳目主義批判①

徳目をもれなく教えなければならないという考え自体があやまりである←現実の道徳の実践は、さまざまな徳目を同時に総合的にあらわしながら、それら全体に具体的な一定の意味を賦与し、それらを一元的に統合して成立しているものにほかならない。

その、さまざまな徳目を全体的に方向づけ意味づけるべき統一的原理となるべきものが自他の尊重～

宮坂哲文(1959)生活指導と道徳教育 明治図書

## 教育学の先達に学ぶ④

### ● 徳目主義批判②

抽象的当為の立場をふりかざし、それが実現されることが実は不可能であるにもかかわらず、あたかも可能であるかのごとく見せかけて効果をあげようとするのが、徳目主義なのである。

(徳目主義の)体系系統なるものは、目標相互の具体的な関係を度外視して成立させられたものであるから、抽象的には整っていても、現実にはばらばらの効果しか収めることができない。

←矛盾の具体的な追究から身をさけ逃避

←徳目は、具体的な生きた世界にはいると同時に衝突をはじめ

上田薫(1993)道徳教育論(上田薫著作集6) 黎明書房

## 教育学の先達に学ぶ⑤

### ●生きた現実から

子どもの切実な問題解決を、そのもっともふさわしい時と場所において道徳教育の手段とするこれまでのやり方

人間がもっとも内面的なものを発現するのは、具体的な問題解決において、ぎりぎりの選択の場に立たされたときである

子どもたちに望ましい内面性を養うためには、すなわち、自己の全存在をかけていかにすべきかに思いをひそめ考えぬくことをさせるためには、意味ある決断の場を与え、それを手がかりとして教育することが不可欠である。それは無内容ではできない。きわめてゆたかな知的探求がともなわれなくては成り立たないことえある

上田薫(1993)道徳教育論(上田薫著作集6) 黎明書房

## 教育学の先達に学ぶ⑥

### ●目標は過程の中にこそ

過程を目標から切断したり、あるいは目標の単なる従属物と見なしたりする立場は、当然具体的な事態を軽視している「目標は、働くものでなければならないという意味において、またしたがって具体化されざる目標はそれ自体存在としては無意味であるということにおいて、過程の中にこそ目標が位置づけられなければならない

上田薫(1993)道徳教育論(上田薫著作集6) 黎明書房

## 教育学の先達に学ぶ⑦

### ●「生活指導」を通して

生活指導は学校教育の領域をあらゆる概念ではなく、機能ないし作用をあらゆる概念だ

生活指導とは一人一人の子どもの現実にそくして、かれらが人間らしい生きかたをいとなむことができるように、援助することである

←豊かな人間理解にもとづく集団をきずきあげ、その活動へのひとりひとりの生き方を(中略)より高いものに引きあげていく教師のしごと

道徳教育はつねに子どもたちの日々の生活に根をおろした形で行われていかなければならない

道徳はむしろ日々の生活のなかで子どもたち自身によって学びとられ、獲ち<ママ>とられていくべき性質のもの

宮坂哲文(1959)生活指導と道徳教育 明治図書

## どのように「道徳」が学ばれるか

### ●切実な問いを持つ

・思考、判断、行為のプロセスによる認識形成

### ●習慣化と態度形成



# 教育学の先達に学ぶ⑧

## ●「道」と「徳」

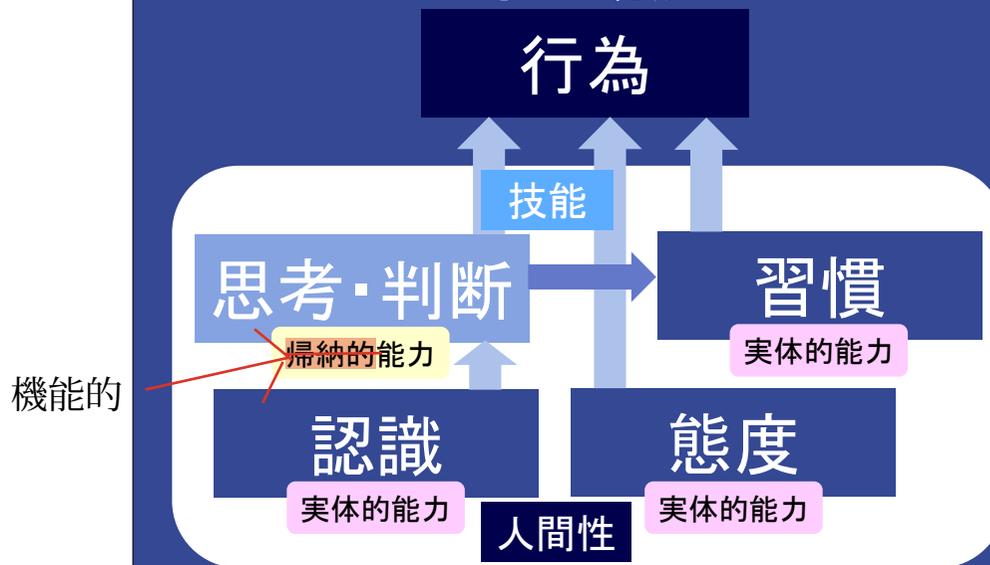
道(知識の側面):「善くあるあり方」/正しくある行い方 / 徳(習慣の側面):「習慣的に体得した品性」→徳の教育:内的強制力(道徳的主体性)の養成、意志と情操:「徳の教育が十分に効果的であるためには、それはいよいよ強く「道」の教育に結合しなければならない」

## ●実践的三段論法

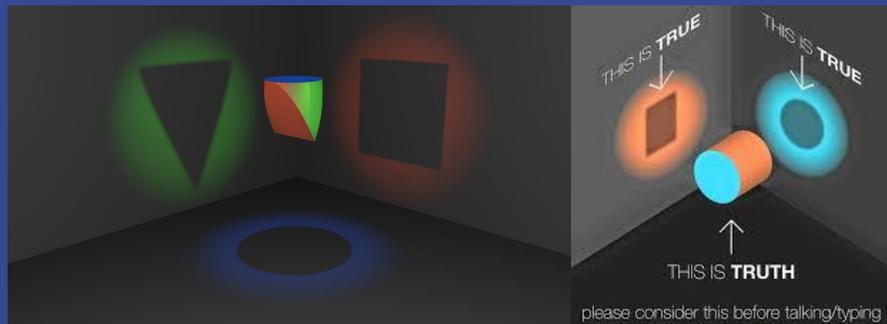
①行為の「原則」、②「状況」についての知識、③ある行為をなすべき/なすべきではないという「結論」の推論←三種類の「知識」の重要性:修身教育は①に終始してきた。→「道」の教育で最終的に大切に考えられるものは、子どもが遭遇するであろう生活場面において、子どもがそれぞれに自分自身の振舞い方を決定できるように、子どもたちを指導してやることである。「原則・原理の知識に劣らず、歴史や社会についての知識や訓練、あるいは広く、諸科学についての知識や訓練が、道徳問題の解決に役立つかぎりにおいて必要となるのである」

村井実(1967)道徳は教えられるか 国土社

# 心理学の観点から



# 思考の深まりと認識形成:ものの見方・考え方



複眼的にみる

思考の深まり

THINK FROM MULTIPLE PERSPECTIVES

# 思考とは

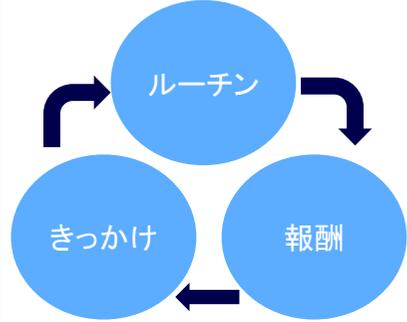


# 習慣とは

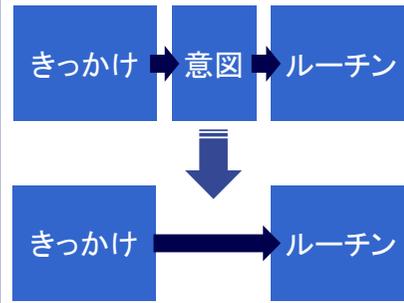
意識や努力の感覚なしに特定の行動を  
成功裏に遂行できる能力: **行為が身体化した状態**

## ■ 習慣化のメカニズム

フィードバック説:  
報酬(広義)による

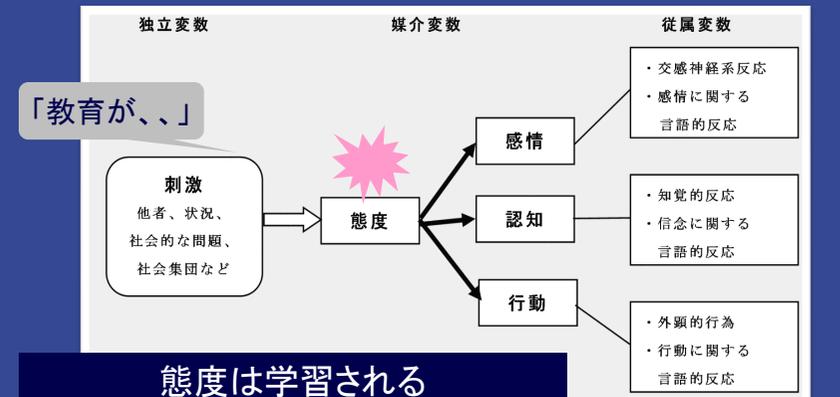


認知説: 意図の繰り返しによる



# 態度とは

特定の対象に対する注意や行為の準備状態、傾向性



態度は学習される  
「認識の深まり+感受性の高まり」

Behavioral components of attitudes.  
New Haven: Yale University Press.

# 「道徳教育」のカリキュラム をどうするか

## ● 個性と社会性の統合的発達

: 「よりよく生きる」ための学び

・内面性(認識、習慣、態度)と他者との関わり

## ● 生きた知識としての「コモンセンス」(良識・分別)と人間形成



# 実践の転換と教育課程の再編成

## ● 学校教育を通じた人間的成長を

- ・学習指導と生活指導が一人の子どもをめぐって統合(宮坂,1959)
- ・体験の総体としてのカリキュラム⇔教育課程
- ・能力(コンピテンシー)の発達を促す←コンテンツ主義(徳目主義など)からの脱却  
→子どもの学校生活全体における経験という観点から教科外教育をどうとらえるかという問題: 教科、領域の「壁」

## ● 教育実践の抜本的転換

- ・「読み物教材」と「1徳目1単元」の限界
- ・体験的な問題解決学習へ: 「考え、議論する」を超えて→「道徳」という名称でよいのか
- ・先行実践に学ぶ

## ● 教育課程の再編成?

- ・教科外課程の統合: 「市民と生活」領域
- ・教科課程(と)の統合: 小学校生活科、家庭科、中学社会科、高校公民科